令和６年度　園　評　価

（園名）大垣市立安井保育園

【園目標】	【前年度の成果と課題】
心身ともにたくましく 思いやりのある子	・園外保育の年間計画を作成し、保育者間の話し合いのもとPDCAサイクルを行う。 ・引き続き、特別支援に関する園内研を行い、職員の質も向上に努めていく。 ・定期的に保護者がキッズビューを既読するようこまめな声かけや働きかけをする。

4段階評価　　〇保育者　☆関係者

観点		短期目標(評価項目)	自己評価	保護者評価	評価及び意見の概要
子どもへの保育・教育	全般	ねらいや手立てを週案に位置付け、反省に基づいて改善していく。	3	3.8	〇職員間で定期的に子どもの姿からねらいや手立ての見直しを行うことができた。また、支援児の行動が変化するたびに、支援方法について話し合い、よりよい方法を工夫し対応することができた。 〇支援児に対する課題を焦点化し、評価を数値化することで、継続的に成長や課題が見えやすい週案となった。 ☆環境を見ると園としての方針が徹底しており、統一感がある。 ☆遊びの選択肢に意図性やねらいがあり、一人一人をよく見た上で、何を育てたいのかが明確になっていた。園生活をよりよいものにしたいという職員の思いが伝わってくる。
	つよい体	36の基本動作を取り入れ、体を動かして遊ぶ心地よさを味わう。	2.9	2.2	〇短い時間でも毎日戸外へ出て体を動かす遊びを行ったり、様々な活動や行事をきっかけにして新しい動きに挑戦できるようにしたりした。保育者の見届けの中、繰り返し行うことでできる動きも増え、その子なりの自信へつながった。 〇園外保育に出かけたり、チャレンジカードを活用したりして体を動かす機会を設けることができた。 〇園外保育の年間計画通りに進めるのは時期的に難しいことがあったため、気候のよい時期に回数を増やすなど見直しをしていく。 ☆遊びの中の基本動作を育てようという意図が分かる。36の基本動作を発達段階ごとの目標や行事との関連性を見える化するとよい。 ☆36の基本動作を全て取り入れるのは難しいので、課題を見出しそこを重点的に行えば子どものためになると思う。園全体で取り組んでいることが分かるので、もう少し評価が高くてもよいと思う。
	ゆたかな心	（0・1・2・3歳児） 仲間や自分のよさに気付き、「いいね」と交わし合い、自己肯定感を高める。	2.7	2.4	〇「いいね」という言葉で保育者や友達に認められることで、自信をもつことができ、新しいことにも挑戦しようとする姿が増えた。支援児に対しても、周りの子たちが支援児のがんばりを認め、「いいね」と声をかける姿が増えた。 〇「自分でできた！」と思えるように、さりげない援助に心がけた。また、周りの子の姿も知らせることで刺激を受け、意欲的に行動するようになった。 〇意欲がない子ややる気があっても課題が乗り越えられない子の要因を探り、援助方法をさらに考えていく。 ☆保育者が一人一人を上手に誉め、価値付けている場面がたくさん見られた。 ☆保育者がいつも明るくとても園の雰囲気がよい。子どもも自然に笑顔になり、園生活を楽しんでいるように見える。
		（4・5歳児） 他者の話に関心をもちよく聞いたり自分の思いを伝えたりする。	2.9	3.2	〇当番活動や人前で話す場を設け、話を聞く姿勢を繰り返し伝えていくことで、話を聞く姿勢が身に付いてきた。 〇自分の思いを押し通そうとする姿もあるが、その子なりに相手の思いを理解できるようになった。一人一人の思いも大切にしながら、相手の思いも代弁し気付かせていく。 〇トラブルが起きると、自分で解決しようとせず保育者に訴えてくる子が多い。思いを伝えたことを認めながら、子ども同士で解決できるよう仕向けていきたい。 ☆話し合う場面でも、他者の意見を否定することなく、良い雰囲気の中で意見交流が出来ていた。仲間を大切にして聞く姿は5歳児とは思えないくらい良い姿であった。 ☆発表の場では挙手が多く、聞く側も発表者へ体をしっかり向けて聞いていた。話し合いの姿勢が育っている。
	家庭・地域	話し合う機会を大切にし、職員や他機関との連携を密にし、共通した支援を行う。	2.8	2.5	〇けがやヒヤリハットの発生後は、話し合う時間を重視した。二度と同じことが起きないように、園全体で共通認識していく。 〇他機関への見学を活かし、職員間で学びの共有を行い資質向上へと繋げた。 〇4・10・1月の園内研で、支援の必要な子の成長や変化を再度話し合い、支援方法を共通認識していきたい。 ☆子どもの姿や指導方針、環境の統一感からも、職員間でよく話し合われていることが伝わってくる。他の機関と連携して専門性を高めているところも園の落ち着きに繋がっているのだと感じる。 ☆よりよい保育をするため、他施設の指導法を受け入れ、勉強する保育者の意識の高さが素晴らしい。 ☆子どものための行動や言葉であれば、保育者は、子どもや保護者に対する表現の仕方を気にすることはないと思う。

【次年度に向けて】
・園外保育と異年齢交流の指導計画の作成と改善を行っていく。
・36の動きを基盤として体作りができてきたので、継続しながら発達に応じた遊びの工夫や隙間時間の活用を行っていく。
・園内研に年3回（4・10・1月）支援児についての話し合いを行い、全職員が子どもの実態や支援方法について話し合い共通認識をしていく。
・全クラスの公開保育を行い、互いの保育を高め合うための園内研修の在り方を具体化する。